

看護学専攻カリキュラムの評価と課題

－ 3年間の学生評価の推移から－

柏 美智・住吉 智子・成田 太一・石田真由美
坂井さゆり・横野 知江・柿原奈保子・西方 真弓

Key words：看護基礎教育課程，質評価，学生評価，カリキュラム

要旨 本調査は、現行カリキュラムで教育を受けた3年間の卒業年次学生の看護学専攻のカリキュラム評価の推移と本学における物的・人的学習環境の評価を明らかにすることを目的とした。2015、2016、2017年度に卒業した4年生計226人を対象に自記式質問紙調査を実施し、回答が得られた197人(87.2%)を分析対象とした。調査内容は、学習目標の達成状況やカリキュラム、学習支援状況に関する学生の評価である。

カリキュラム全体の充実度および学習目標の達成度は、「充実していた」、「できた」と回答した割合が、3カ年ともに8割を超え、学習支援については、7割以上が「充実していた」と回答した。自由記述からは、科目の開講時期調整の要望や、学習設備面の改善を期待する回答が多かった。

本調査からは、現行カリキュラムの教育内容、教育体制については、概ね高い評価が示された。今後は調査結果に基づき、次期カリキュラム改正に向けて、より充実した看護基礎教育と学習支援体制が必要であることが示唆された。

I 緒言

近年、日本では、健康ニーズの多様化、医療技術の進歩により質の高い看護専門職者の育成が求められており、看護系大学の量的拡大の課題も含め、教育の質保証の必要性が強調されている¹⁾。これに伴い、文部科学省は、教育の質保証の観点から高等教育機関に対し、ディプロマ・ポリシー（以下DP）、カリキュラム・ポリシー（以下CP）、アドミッション・ポリシー（以下AP）の3つのポリシーによる、自己点検・評価と改善、情報の積極的な発信に努めることを推奨した。さらに2017年10月には看護学教育モデル・コア・カリキュラムが策定され、具体的な学修目標と内容が提示された²⁾。これらを受けて本学では、より質の高い看護専門職者の育成に向けて、進行しているカリキュラム（以後、現行カリキュラムとする）が開始した2012年から一貫して掲げている教育目標とモデル・コア・カリキュラム、2016年から改めて明文化した3つのポリシーを照合、再点検を教員全体で実施した（図1）。そ

の結果、従来の目標と3つのポリシー、看護学教育モデル・コア・カリキュラムは一致度が高く、整合性が取れていることが確認できた。

大学教育の質保証として、次に重要となるのは、教育評価である。本学は、現行カリキュラムの教育評価の一つとして、2016年3月にカリキュラム改正の完成年度の卒業生を対象にアンケートを実施し、その内容を報告した³⁾。

しかし、単年度だけでは地域包括ケア時代のカリキュラム改正と教育体制の再構築を控え、評価として不十分と考えた。

そこで今回、現行カリキュラムで教育を受けた3年間の卒業年次学生の現学看護学専攻のカリキュラム評価の推移および、学習支援および学習環境の評価を明らかにすることを目的とした。

II 方法

1. 対象と方法

看護学プログラム:ディプロマポリシー

1. 看護の対象が身体的・精神的・社会的・スピリチュアルな存在である人間として理解し、その発達段階や健康状態、生活状態を関連させて全人的に捉える能力
2. 看護専門職としての倫理観、豊かな感性と人間性を身につけ、援助的な人間関係を形成する力を培い、看護実践できる能力
3. 看護実践において、科学的根拠に基づいた看護アセスメント能力を養うとともに、健康上の課題を解決するために必要な基礎的な知識と技術を修得した者
4. 社会の動向や地域のニーズを把握し、保健医療福祉チームにおいて看護専門職としての責務を踏まえた指導的役割を遂行できる基礎的能力
5. 世界の人々の健康な生活の実現に向け、国際的視野及び異文化看護の視点から、環日本海並びに国際社会において看護の機能や役割を遂行できる基礎的能力
6. 看護について常に探究心を持ち、看護の開発・開拓のための研究的態度を身につけ、研究を継続するとともに、それらを看護実践・教育に生かすことができる能力

看護学プログラム:カリキュラムポリシー

1. 知識・理解
 - 1) 専門分野を超えた幅広い知識と深い教養
 - 2) 看護の対象となる人間に係わるホリスティック（生物学的・心理学的・社会学的側面を含む）な知識と理解
 - 3) 看護の基盤となる人体の構造や機能、病態、治療に係わる系統的知識と理解
 - 4) 健康科学、保健医療福祉活動に係わる学際的知識と理解
 - 5) 現場で専門技能を応用し課題を見出し、解決策を考えられる。研究に係わる専門的知識と理解
2. 当該分野固有の能力
 - 1) 人間愛に基づいて対象を全人的に理解しながら信頼関係のもと対等な立場で看護実践できる
 - 2) エビデンスに基づく看護過程を通して、あらゆる対象・場・状況に応じた看護介入ができる
 - 3) 医療安全に関する指針等に基づいて感染を防止し医薬品や医療機器の適切な使用と安全を管理できる
 - 4) 疾病予防や健康の維持増進の観点から対象（個人・家族・集団）に必要な保健指導ができる
 - 5) 看護に係わる課題を探索し専門的な知識と研究手法を駆使して必要な理論を体系立て一定の結論を見出せる
3. 汎用的能力
 - 1) 相手を尊重しつつ誠実かつ率直に自分の気持ちや意見をわかりやすく伝えられる
 - 2) チームの目線に沿って構成員の意見や行動を調整・整理し、協調性とリーダーシップが発揮できる
 - 3) 基礎的な英語能力をもち、言語学習を通じて英語圏外においても活動できる資質を備える
 - 4) 多文化間での活動に不可欠な異文化理解と、翻って自国の文化を客観的に洞察できる能力をもつ
 - 5) 専門知識や技術をどの分野に活かせるか、社会的役割を認識しキャリアデザインに役立てられる
 - 6) 調査データを解析し情報機器を駆使して情報を収集・加工し新たな解釈を見出し発信できる能力をもつ
4. 姿勢
 - 1) 命の尊重と個人の尊厳の保持を旨とする態度を備える
 - 2) 誠意と連携・連帯の精神をもち自律的に看護を実践できる
 - 3) 傾聴や対話を通して対象を共感的に理解することができる
 - 4) 課題に対して主体的、客観的、創造的に取り組むことができる
 - 5) 新しい知識や技術を学び看護を探索し続けることができる

看護学プログラムのアドミッション・ポリシー

1. 看護師、保健師や助産師の役割に関心をもち、多様な社会的要請に応じて貢献していきたいというチャレンジ精神のある人
2. 医療や健康の保持増進に関心があり、協調性豊かな人
3. 人々の生活と社会に深い関心を持ち、人間愛に満ちた人
4. 生涯にわたって主体的に学習し、自ら成長していきたいという意欲がある人
5. 医療ならびに看護に関する科学的知識と技術の習得に熱意を示す人
6. 高等学校卒業レベルの幅広い基礎学力を身につけている人

※これらは2018年度までのものである

図1 看護学プログラムのディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー

対象は、本学看護学専攻に在籍し、現行カリキュラムの履修を修了した2015、2016、2017年度の編入生を除外した4年生として、自記式調査法を実施した。各年度の対象者人数は以下のとおりである。

2015年度4年生：77人(以後2015年度)

2016年度4年生：74人(以後2016年度)

2017年度4年生：75人(以後2017年度)

2. データ収集期間

各年度2月に調査を行った。

3. データ収集方法

2016年から2018年の各年の2月初旬に卒業年次の学生が集合した機会に、研究の趣旨・目的、研究の方法、倫理的配慮を文書及び口頭で説明し、自記式質問紙を配布し、期日までに所定の回収箱へ提出するよう依頼した。3年間同じ質問紙を用いて同じ時期・回収方法により調査した。

なお、調査票は無記名とし、対象者が回答に協力し、調査票を提出したことをもって、研究参加に同意したものとみなすことを説明した。

4. 調査内容

入学年度、カリキュラムの組み立ての充実度（「非常に充実していた」～「充実していない」の4件法、および自由記述）、学習目標の達成度（教育目標別の到達度12項目：「非常にできた」～「できなかった」の4件法）、学習支援状況（「非常にあてはまる」～「あてはまらない」の4件法、および自由記述）について回答を得た。質問項目は、本学看護学専攻の学習目標および文献を参考に作成した。

5. 分析方法

単純集計とともに、卒業年度による割合の差の分析を χ^2 検定および残差分析にて行った。残差分析では、各項目で観測値と期待値の差から調整済み残差を算出し、その値の絶対値が1.96を超えた場合、観測値は期待値と有意に一致しないとされた⁴⁾。なお、学習目標の達成度は、「非常にできた」「できた」を達成群、「あまりできなかった」「できなかった」を非達成群として2群化した。また、学習支援状況は「非常にあてはまる」「あてはまる」を該当群、「あまりあてはまらない」「あてはまらない」を非該当群として2群化した。統計ソフトはIBM SPSS statistics 20 for Windowsを用いた。有意水準は5%とした。自由記述は、3年度分をま

とめてコード化し、意味内容の類似性・相違性を検討しながらカテゴリー化した。カテゴリーには、その内容を表すカテゴリー名をつけた。

6. 倫理的配慮

本調査は厚生労働省・文部科学省の「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」および日本看護協会の「看護研究における倫理指針」に則って実施した。また、調査への協力は任意であり、協力の有無によって不利益を被ることはないこと、調査は無記名式であり調査票の提出をもって、研究参加に同意したものとみなすこと、途中中断も可能であること、回答・集計・公表のいずれの段階においても個人が特定されないことがないことを調査の説明の際に文書および口頭で説明した。

Ⅲ 結果

各年度における有効回答数（率）は次のとおりである。

2015年度：59人(76.6%)、2016年度：67人(90.5%)、2017年度：71人(94.7%)。

なお、以下【】はカテゴリー名、〔〕はサブカテゴリー名を示す。

1. カリキュラムの組み立ての充実度

カリキュラムの組み立ての充実度は、3ヵ年比較を表1に、自由記述を表2に示した。3ヵ年ともに8割以上が達成群に該当した。自由記述は【開講時期調整の要望】、【カリキュラムの構成の適切さ】、【カリキュラム構成の不適切さ】、【科目の質と量の充実への要望】、【自己の学びに対する振り返り】に分類され、充実度の評価とともに要望や改善点も含まれた。中でも【開講時期調整の要望】についての自由記述は最も多く、そのすべてが開講時期に関する要望であった。

【カリキュラムの構成の適切さ】については、〔幅広い学び〕と〔学習進度に合わせた科目構成〕、〔複数の資格取得が可能〕との意見がある一方で、【カリキュラム構成の不適切さ】の意見の多くが〔学年や学期における科目数の偏り〕であった。

【科目の質と量の充実への要望】は、学生は、質・量共にさらなる充実を望んでいた。

2. 学習目標の達成度

学習目標の達成度として、3ヵ年比較を表3に示し

表1 カリキュラムの組み立ての充実度

	2015年度 (n=59)		2016年度 (n=67)		2017年度 (n=71)	
	n	%	n	%	n	%
非常に充実していた	8	13.5	15	22.4	18	25.4
充実していた	44	74.6	44	65.7	45	63.4
あまり充実していない	6	10.2	3	4.5	5	7.0
充実していない	0	0.0	0	0.0	1	1.4
無回答	1	1.7	5	7.4	2	2.8

表2 「カリキュラムの組み立ての充実」についての自由記述

カテゴリー	サブカテゴリー	コード (n)
開講時期調整の要望	低学年への専門科目移行の要望	2年次以降の負担が大きいため1年次の専門科目を増やしてほしい(14)
		1年次の専門科目を増やしてほしい(5)
		1年次からもっと看護を学びたい(4)
		1年次が暇(2)
進路や就職を見越した開講時期調整の要望	進路や就職を見越した開講時期調整の要望	2年の講義やテストが多く1つ1つの学習を深められない(2)
		1年次に専門基礎科目を増やし、その分2~3年次の専門科目を増やしてほしい(1)
		1,2年次に専門科目を増やしてほしい(1)
学期毎の科目数均等化への要望	学期毎の科目数均等化への要望	2年次前期の授業を後期に分散させてほしい(1)
カリキュラム構成の適切さ	幅広い学び	選択科目が充実していた (3)
		科目がつめこまれている感じがしたが知識や技術を得ることができた(1)
		臨床から地域における看護を幅広く学ぶことができた(1)
		教養を学ぶことができた(1)
		講義・演習・実習と段階的に学ぶことができた(2)
学習進度に合わせた科目構成	学習進度に合わせた科目構成	講義と演習, 実習の順序, 内容, 時期が良い(1)
		複数の資格取得が可能
不都合がない	不都合は感じなかった(2)	保健師, 助産師, 看護師の3つの国家資格が取得できるカリキュラム (2)
		4年次におけるゆとり
カリキュラム構成の不適切さ	学年や学期における科目数の偏り	不都合はない
		4年次におけるゆとり
		就職活動と保健師実習(4年次)がかぶると忙しい(1)
		2年時以降の負担が大きく、他校より遅れていると感じた(1)
		3年次前期授業が多い(1)
授業時間の重複	授業時間の重複	1年次に看護について学ぶ時間がほとんどなくモチベーションが下がった(1)
		科目数や演習が多すぎる時期とそうでない時期の差が大きかった(1)
		3年次の看護学実習の後何も実習がないのは病院勤務をしたい人には不安(1)
科目の質と量の充実への要望	科目の時間数増加の要望	実習と必修が重なって出られない授業があった(1)
		もっと時間数が多くても良い(1)
		臨地実習と演習をもう少し増やして実践力を高めたい(1)
自己の学びに対する振り返り	科目内容の充実の要望	全学年で英語を取り入れてほしかった(1)
		包帯法を学びたかった(1)
		同学部・学科の学生とチーム医療について学ぶ機会がもっとほしかった(1)
異なる分野への興味	学びの不十分さの実感	知識が身につけていない中で実践したため、技術が身についた実感がない(1)
		技術演習に限りがあり不安のまま実習となった(1)
	異なる分野への興味	他にも学びたい分野があった(1)

表3 学習目標の達成度

設問	卒業年度														p														
	3か年全体							2015年度								2016年度							2017年度						
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	期待度数	達成済み差	n	%		n	%	期待度数	達成済み差	n	%	n	%	期待度数	達成済み差				
1	196	99.5	59	100.0	58.7	0.7	66	98.5	66.7	-1.4	71	100.0	70.6	0.8	0.38	看護の対象が身体的・精神的・社会的・スピリチュアルな存在である人間として理解する													
2	196	99.5	59	100.0	58.7	0.7	66	98.5	66.7	-1.4	71	100.0	70.6	0.8	0.38	対象の養護段階や健康状態、生活状態を関連させて全人的に捉える能力を身につける													
3	196	99.5	59	100.0	58.7	0.7	66	98.5	66.7	-1.4	71	100.0	70.6	0.8	0.38	看護専門職としての倫理観を身につける													
4	191	97.0	57	96.6	57.2	-0.2	64	95.5	65.0	-0.8	70	98.6	68.8	1.0	0.57	看護専門職として、豊かな感性と人間性を身につける													
5	190	96.4	55	93.2	56.9	-1.6	65	97.0	64.6	0.3	70	98.6	68.5	1.2	0.25	援助的な人間関係を形成する力を身につける													
6	164	83.2	43	72.9	49.1	-2.5	57	85.1	55.8	0.5	64	90.1	59.1	1.9	0.03 *	看護実践でできる能力を身につける													
7	187	94.9	55	93.2	56.0	-0.7	63	94.0	63.6	-0.4	69	97.2	67.4	1.1	0.54	看護実践において、科学的根拠に基づいた看護アセスメント能力を身につける													
8	185	93.9	54	91.5	55.4	-0.9	63	94.0	62.9	0.1	68	95.8	66.7	0.8	0.60	健康上の課題を解決するために必要な知識、並びに基本的な技術を修得する													
9	171	86.8	46	78.0	51.2	-2.4	57	85.1	58.2	-0.5	68	95.8	61.6	2.8	0.01 *	保健医療福祉チームにおいて看護専門職としての責務を踏まえた指導的役割を遂行できる基礎的能力を身につける													
10	146	74.1	34	57.6	43.7	-3.5	53	79.1	49.7	1.1	59	83.1	52.6	2.2	<0.01 **	国際的視野及び異文化看護の観点から、国際社会において看護の機能や役割を遂行できる素地を身につける													
11	178	90.4	53	89.8	53.3	-0.2	59	88.1	60.5	-0.8	66	93.0	64.2	0.9	0.61	看護について常に探究心を持ち、看護の開発・開拓のための研究的态度を身につける													
12	163	82.7	43	72.9	48.8	-2.4	59	88.1	55.4	1.4	61	85.9	58.7	0.9	0.05	研究成果を看護実践・教育に生かすことができる基礎的能力を身につける													

χ^2 検定・残差分析 * p<0.05 ** p<0.01

nは、「非常によかったです」「できた」の達成群のみを示す。

表4 学習支援状況の充実度

	2015年度(n=59)		2016年度(n=67)		2017年度(n=71)	
	n	%	n	%	n	%
非常に充実していた	6	10.2	11	16.4	10	14.1
充実していた	38	64.4	43	64.2	49	69.0
あまり充実していない	12	20.3	6	9.0	10	14.1
充実していない	0	0.0	0	0.0	1	1.4
無回答	3	5.1	7	10.4	1	1.4

た。3ヵ年全体の該当群の評価が高値の項目は、「看護の対象が身体的・精神的・社会的・スピリチュアルな存在である人間として理解する」99.5%、「対象の発達段階や健康状態、生活状態を関連させて全人的に捉える能力を身につける」99.5%、「看護専門職としての倫理観を身につける」99.5%であり、2015年度と2017年度はいずれも100.0%が「できた」と回答した。一方、3ヵ年全体の該当群の評価が低値の項目は、「国際的視野及び異文化看護の視点から、国際社会において看護の機能や役割を遂行できる素地を身につける」74.1%、「研究成果を看護実践・教育に生かすことができる基礎的能力を身につける」82.7%、「看護実践できる能力を身につける」83.2%であった。

3ヵ年の差を比較すると、「看護実践できる能力を身につける」を「できた」と回答した割合は、2015年度が他の年度に比べて有意に低かった($p=0.03$)。また、「保健医療福祉チームにおいて看護専門職としての責務を踏まえた指導的役割を遂行できる基礎的能力を身につける」($p=0.01$)、「国際的視野及び異文化看護の視点から、国際社会において看護の機能や役割を遂行できる素地を身につける」($p<0.01$)を「できた」と回答した割合は、2017年度が他の年度に比べて有意に高かった。

3. 学習支援状況

学習支援状況の充実度について、3ヵ年の結果を表4に示した。3ヵ年ともに7割以上が該当群であった。学生から見た学習支援状況の評価を表5に示した。3ヵ年全体の該当群の評価が高値の項目は、「実習において、教員や指導者等の支援体制は整っていた」92.9%、「教職員は学生の意見に耳を傾け、近づきやすい存在であった」91.8%、「実習施設の設備は、実習環境として整っていた」91.3%であった。一方、3ヵ年全体の該当群の評価が低値の項目は、「学習に必要な

な機器備品は充実していた」45.9%、「教室環境は快適であった」49.7%、「図書館の蔵書や雑誌は最新・広範囲で活用しやすかった」71.4%であった。3ヵ年の差を比較すると、「学習に必要な機器備品は充実していた」($p=0.03$)、「図書館の蔵書や雑誌は最新・広範囲で活用しやすかった」($p<0.01$)、「教職員は学生の意見に耳を傾け、近づきやすい存在であった」($p=0.01$)について、あてはまると回答した割合は、2015年度が他の年度に比べて有意に低かった。また、「図書館の蔵書や雑誌は最新・広範囲で活用しやすかった」($p<0.01$)、「自己学習をするための看護技術に関わる設備、物品は活用しやすかった」($p=0.04$)についてあてはまると回答した割合は、2016年度が他の年度に比べて有意に高かった。

自由記述においては、【学ぶための人的・物的環境の良さ】に満足している回答がある一方で、【快適な学習環境への希望】や【印刷関係の制限の厳しさ】など、設備面の改善を期待する回答が多かった(表6)。

IV 考察

1. 現行カリキュラムにおける学生評価の現状と課題

3ヵ年の継続した調査結果において、本学のカリキュラムの組み立ての充実度および学習目標の達成度に関する設問について、肯定的な回答をした学生の割合は、3ヵ年ともに8割を超えた。これは現行カリキュラムが、学生にとって有効で充実度の高い内容と評価したと推測された。同時に、3ヵ年ともに学習目標は概ね達成されたことが示された。

しかし、専門科目の開講時期と過密カリキュラムの改善への要望は多く、現行カリキュラムの組み立てに関する課題も浮き彫りとなった。この課題は、他大学の看護学科の過密課題とも類似する⁵⁻⁶⁾。過密カリキュラムの課題は、本学は総合大学として教養を幅広く学

表 5 学習支援状況の評価

	設問	卒業年度												p				
		3か年全体				2015年度				2016年度					2017年度			
		n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%		n	%	期待度数	期待度数
1	履修に必要な手続きがスムーズに行えるシステムが整っていた	163	89.1	49	86.0	50.8	-0.9	55	93.2	52.6	1.2	59	88.1	59.7	-0.3	0.43		
2	教室環境（広さ、設備など）は快適であった	91	49.7	27	47.4	28.3	-0.4	32	54.2	29.3	0.8	32	47.8	33.3	-0.4	0.70		
3	学習に必要な機器備品（コンピューター、コピーなど）は充実していた	84	45.9	18	31.6	26.2	-2.6	33	55.9	27.1	1.9	33	49.3	30.8	0.7	0.03 *		
4	図書館の蔵書や雑誌は最新・広範囲で活用しやすかった	130	71.4	30	53.6	40.0	-3.6	49	83.1	42.1	2.4	51	76.1	47.9	1.1	<0.01 **		
5	自己学習をするための設備、視聴覚教材は十分であった	142	77.6	38	66.7	44.2	-2.4	49	83.1	45.8	1.2	55	82.1	52.0	1.1	0.06		
6	自己学習をするための看護技術に関する設備、物品は活用しやすかった	138	75.4	38	66.7	43.0	-1.8	51	86.4	44.5	2.4	49	73.1	50.5	-0.5	0.04 *		
7	学生の意見が授業（実習を含む）に反映する仕組みがあった	149	81.4	43	75.4	46.4	-1.4	51	86.4	48.0	1.2	55	82.1	54.6	0.2	0.31		
8	実習施設の設備は、実習環境として整っていた	167	91.3	50	87.7	52.0	-1.1	56	94.9	53.8	1.2	61	91.0	61.1	-0.1	0.39		
9	実習において、教員や指導者等の支援体制は整っていた	170	92.9	50	87.7	53.0	-1.8	55	93.2	54.8	0.1	65	97.0	62.2	1.6	0.13		
10	教職員は学生の意見に耳を傾け、近づきやすい存在であった	168	91.8	47	82.5	52.3	-3.1	57	96.6	54.2	1.6	64	95.5	61.5	1.4	0.01 **		
11	就職や進学に関するサポートは充実していた	160	87.4	51	89.5	49.8	0.6	54	91.5	51.6	1.2	55	82.1	58.6	-1.7	0.24		

χ²検定・残差分析 * p<0.05 ** p<0.01

nは、「非常にあてはまる」「あてはまる」の該当群のみを示す。

表6 「学習支援状況の評価理由」についての自由記述

	カテゴリー	サブカテゴリー	コード (n)
改善を期待する学習環境	快適な学習環境への希望	教室内の温度・照明管理の不具合	教室・控室・自習室の寒さ, 照明の不具合(16) 照明の暗いスリクーン(1)
		情報機器備品の新機種・充実の希望	学生が使用できるPC増加の希望(5) 新規の情報設備導入の希望(2)
		主体的学習のための教室の少なさ	グループワークのためには狭い教室(15) 演習室開放時間の拡大への期待(4) 不足する自習室の席(1)
	印刷関係の制限の厳しさ	印刷機の不調・制限による不便さ	PC室のプリンターの故障の多さ(14) 不便なコピー機(3)
		印刷枚数制限の厳しさ	不十分な年間印刷枚数(28)
	図書館利用の不便さ	遠い図書館	校舎と距離がある図書館(1)
		不便さを感じる館内環境	不足に感じる蔵書数(9) 暗い図書館の環境(2)
	教員への期待と要望	近寄り難い存在の教員	教員と親しくなりたい(2)
		不足を感じる指導・就職支援内容	教員による指導力の格差(1) 早期からの就職支援のニーズ(2)
	い満る足環し境て	待遇とサービスへの希望	事務職員のサービス向上への希望
学ぶための人的・物的環境の良さ		学習施設が魅力的	実習施設の豊富さと学習機会の魅力(1)
		使いやすい設備	使いやすい設備(1)
		支援体制の良さ	主体的な学びにより得るものが大きい環境(2)

べる特徴を活かしつつ、学習目標達成を兼ね備えた組み立ての検討が必要であり、今後の課題と推測される。

学習目標の達成度に関して、2015年度では、他の項目に比べ達成群の割合が低い評価項目であった「看護実践できる能力を身につける」(72.9%)、「保健医療福祉チームにおいて看護専門職としての責務を踏まえた指導的役割を遂行できる基礎的能力を身につける」(78.0%)は、2017年度には、各々90.1%、95.8%に上昇した。この理由として、2012年の現行カリキュラム開始時から、少しずつ大学病院の看護師が講義や学内演習に参画するようになり、実践的な指導へと改善が行われたことが、3年間の蓄積した成果となって現れたものと推測する。また、「国際的視野及び異文化看護の視点から、国際社会において看護の機能や役割を遂行できる素地を身につける」については、達成群の割合が2015年の57.6%から2017年度には83.1%に上昇し、教育の成果と示唆された。本学は、2010年にスリランカのペラデニヤ大学と学部間交流協定を締結し、看護学専攻では毎年2~3名の学部生の短期留学を受け入れているほか、大学院博士後期課程にも留学生を受け入れるなど積極的な国際交流を行っている。本学学生とも留学生と交流の場も広がっており、積み重ねてきた国際交流事業が、達成度の上昇に繋がったと推測する。

一方、国際看護に該当する科目が選択科目であること、留学生との交流時期および交流する学生は一部である等、教育としての偏在がある。全学生への教育機会の提供に鑑み、国際看護学の必修化と強化は、将来構想としても重要な要素と推測される。

2. 学習支援状況の改善に向けた課題

今回の調査により、学生からは教員等の支援体制の満足度は、概ね高いことが示された。これは講義から演習、実習と切れ間のない、教員と指導者の教育連携の成果と示唆された。また、自由記載には、【教員への期待と要望】が挙げられていることから、学生の主体性を育みながら支援強化していくことの必要性も示唆された。

今後はFD(Faculty Development)に関する評価を踏まえた、多角的な視点による改善につなげていくことが必要である。

また今回、設備の不備や不満に関する自由記述が散見した。文部科学省の中央教育審議会においても、学習環境は重要な要素である⁷⁾。学生の不平の理由として、省エネの推進により、学生が効果的に学習するための室内環境、物的環境の不十分さや、学生が使用できる、日進月歩の情報機器の量的充実が追いついていない現況があると推測される。物理的な環境は、学生

の学習意欲に影響するため、柔軟な学習環境の調整と可能な範囲での改善が必要である。このことは、中央教育審議会が示す「アクティブ・ラーニング」による能動的学修への転換⁸⁾を可能にし、学生の課題解決能力の向上も期待できると考えられる。

3. 本研究の限界と今後のカリキュラム評価およびカリキュラム改正に向けた課題

本稿は学生の自己評価を分析したものであり、あくまでも学生の主観に基づくカリキュラム評価である。今後、客観的な学習評価を行っていくためには、教員や実習指導者等からの評価を組み入れた多角的評価と、年度ごとの継続的なモニタリング評価を合わせた総合的評価が必要である。

V 結論

本学の看護基礎教育課程における3年間の学生評価から、教育内容、教育体制については、概ね高い評価が得られた一方で、学生の学習支援状況に関しては、学習環境に関する課題が明確となった。今後は調査結果に基づき、次期カリキュラム改正に向けて、より充実した看護基礎教育と学生の学習意欲向上のための学習支援体制が必要であることが示唆された。

引用文献

- 1) 日本学術会議：大学教育分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準（看護学分野）
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-h170929-9.pdf>
(2018年11月1日アクセス)
- 2) 文部科学省：看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afiedfile/2017/10/31/1397885_1.pdf (2018年12月1日アクセス)
- 3) 定方美恵子, 成田太一, 西方真弓, 他. 看護学専攻のカリキュラム評価による教育課程のあり方の検討—カリキュラム改正後の卒業年次学生へのアンケート調査から—. 新潟大学保健学雑誌, 15(1): 79-87, 2018.
- 4) 郷式 徹. クロス集計表に対する統計分析の手法— χ^2 検定とFisherの直説法および残差分析と多重比較による下位検定—. 心理科学, 28:56-66, 2008.
- 5) 蒔田寛子, 大島弓子, 山口直己, 他. 2015年度カリキュラム評価の現状と課題—学生・教員からの評価に焦点をあてて—. 豊橋創造大学紀要, (21): 119-141, 2017.
- 6) 長谷川真美, 中村織恵, 鶴田晴美. 東都医療大学における卒業時学生のカリキュラム評価とその課題. 東都医療大学

紀要4(1): 64-73, 2014.

- 7) 文部科学省 中央教育審議会：大学分科会における大学教育の検討に関する作業部会 学生支援検討ワーキンググループ “学生支援・学習環境整備の必要性”
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/029/siryo/attach/1290329.htm (2018年10月31日アクセス)
- 8) 文部科学省 中央教育審議会:新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2012/10/04/1325048_1.pdf (2019年2月7日アクセス)

Evaluation and Problems of Nursing Curriculum through the Trend of Student Evaluations in Three Years

Michi KASHIWA, Tomoko SUMIYOSHI, Taichi NARITA, Mayumi ISHIDA, Sayuri SAKAI
Tomoe YOKONO, Nahoko KAKIHARA, Mayumi NISHIKATA

Department of Nursing, School of Health Sciences, Niigata University

Key words : Undergraduate nursing education, quality evaluation, students' self-evaluation, curriculum

Abstract The purpose of this survey was to clarify the transition of the curriculum evaluation of the nursing major of the students who had graduated this university and were educated in the current curriculum, and to evaluate the study environment in terms of physical and human resource environment at our university.

226 of 4th year students who graduated in 2015, 2016, and 2017 were asked to fill a self-administered questionnaire. Out of them, 196 people (87.2%) who responded the questionnaire were analysis target.

The method is an evaluation based on the achievement state of the learning objective and the degree of fulfillment of the curriculum, and the analysis and evaluation of student description contents on the learning support situation.

The percentage of respondents who answered that the curriculum as a whole and the achievement of the learning objectives as "fulfilling" and "completed" exceeded 80% in all three years, and 70% or more answered "fulfilling".

From the free description, there were many requests for adjustment of the starting time of subjects and expected improvement of learning facilities.

From this survey, it was shown that a generally high evaluation was obtained about the educational contents and the educational system of the current curriculum. Based on the results of this survey, improvement of the nursing basic education and qualitative improvement will be required for future curriculum revision.

Accepted : 2019.6.6